

巻 頭 言

学術総会の発表演題数の変遷

松田ひろし 日本精神神経学会財務担当理事

Hiroshi Matsuda

4年間の欧州留学を終えて帰国した呉秀三は、内科学のうち神経学に興味をもつ三浦謹之助とともに学会創立の準備を行い、日本神経学会として第1回の総会（日本連合医学会第11部神経病学および精神病学部）を2名の主宰のもと、東京で1902年4月4日に開催した。演説全19席と記されている。その後は徐々に演題数も増え、第30回総会（1931年）では、宿題報告2つと演説79席であった。そして新潟で開催された第34回（1935年）では、日本精神神経学会として改名し、名実共に精神医学と神経学を包括する専門学会となった。いわゆる新潟革命である。しかし1944～1945年は戦争の混乱のため総会は開催されず、戦後の1946年に内村祐之主宰のもと、焦土と化した東京で42演題をもって再開された。そして戦前のように演題数も年を追うごとに増え、1960年代には200題を越す勢いとなった。

しかし1969年 島薮安雄主宰のもと、金沢で開催された第66回総会において、評議員会、総会議事の大幅な時間延長により、シンポジウムおよび一般演題のすべてが取り止めとなった。いわゆる金沢学会である。理事会不信任案が可決され、また、保安処分反対の決議が圧倒的多数の賛成により行われた。全国に及んだ大学紛争の最中、当学会の存亡にかかわる事態が起り、その影響もその後数年間続き、演題もないまま評議員会や総会のみが開催された。さらに第73回（1977年）総会はK氏入院問題などのため、1年延期を余儀なくされた。しかし、紛争が下火となった第79回（1983年）総会では、堰を切ったように演題数は101題となり、第91回（1995年）には219題となった。そして最近の総会の演題数は300題を超えている。時代のさまざまな影響により、このように総会の演題数は左右されてきた。金沢学会後は、精神医学や精神医療の質が常に問

われ続け、今日の学会の姿がある¹⁾。

一方、金沢学会でも激しく議論された学会認定医制度は、紆余曲折を経て、当学会による精神科専門医制度として2004年に開始された。これによりこれまでの総会とは異なり、好むと好まざるとにかかわらず、専門医更新のための単位（ポイント）取得を目的とした参加者が増えていった。それに従って逆に一般演題の聴講者は少なくなっていった。追い討ちをかけるように一時日本専門医機構による単位認定の対象から一般演題の発表が外され、さらに発表者にとっても魅力あるものといえなくなってしまった。またこれらとは別の問題として、総会自体への参加者が増えたにもかかわらず、5,000名以上の参加者を収容できる施設も限られて、一部の大都市での開催のみが可能となっていた。それらの結果、ややもすると単位取得のためのシンポジウムや教育講演が中心のプログラム編成の総会となり、内容も地方色のない、座学主体のいわゆる同じ量、同じ味のチェーン店メニュー化の様相を呈することになっていった。最近の総会に参加して、以前の活気ある総会はどこにいつてしまったのかという寂しい思いを抱いているのは著者だけであろうか。

今年第115回学術総会が染矢俊幸会長のもと、6月に新潟市で開催される。これまでの歴史的経緯とその反省を踏まえて、参加者がより主体的に十分に交流し、意見交換ができる場を提供したいとの会長の熱意に賛同し、お手伝いすることとなった。その主体的にかかわる心こそが、プロフェッショナル・オートノミーと思うからである。

文 献

1) 日本精神神経学会百年史編集委員会：日本精神神経学会百年史。日本精神神経学会、2003